

秋田県の話題

県内各地で大規模な水害

記録的な大雨となった7月15日、秋田県内では土砂崩れや河川の氾濫が相次ぎ、道路の冠水も各地で発生した。交通も大きく乱れ秋田新幹線と在来線計243本が運休や区間運休し、2万人以上に影響が出た。秋田自動車道は土砂崩れなどにより8区間で上下線が通行止めとなった。



県は7月23日、この記録的大雨による県内の河川や道路など土木関係の被害額が52億8260万円に上ると明らかにした。秋田市が調査中のため、さらに額が増える見込み。県によると、被害を受けたのは136件。このうち県管理が72件で43億6200万円、市町村の管理が64件で9億2060万円だった。種別ごとにみると、護岸の損壊など河川が79件で18億5610万円、路肩の崩落など道路が55件で24億2250万円、橋台の破損など橋梁（きょうりょう）が2件で10億4000万円となった。農業被害額は21日の報告に秋田市分が加わり、20億4212万円と2億円ほど膨らんだ。冠水などで被害を受けた面積は計5346ヘクタール。

内訳は水稲が3383ヘクタール（1億7176万円）、大豆が1740ヘクタール（1905万円）、園芸作物が223ヘクタール（5064万円）。園芸作物はネギやエダマメ、カボチャなどが大きな被害を受けたという。

竿燈まつり盛大に



7月の記録的な大雨で広い範囲が水につかった秋田市で、東北を代表する夏祭りのひとつ、「竿燈まつり」が3日から始まり、稲穂に見立てたおよそ250本の竿燈が黄金色の光で夏の夜空を飾りました。秋田市の竿燈まつりは、数十個のちようちんをつけた竹ざおを稲穂に見立てて掲げ、五穀豊穡を願う祭りで、国の重要無形民俗文化財に指定されています。

市中心部の大通りでは、3日午後7時すぎに256本の竿燈が一斉に上がり、黄金色のちようちんの明かりが夏の夜空に揺らめきました。祭りでは、大きなもので長さ12メートル、重さ50キロある竿燈を「差し手」と呼ばれる男性たちがバランスをとりながら額や肩、それに腰の上で支える技を次々と披露していきました。ことしは4年ぶりに新型コロナウイルスの制限がなく訪れた人たちは「どっこいしょ」のかけ声を出して、祭りを堪能していました。

一方、先月の記録的な大雨で市の中心部は広い範囲が水につかり、竿燈の「差し手」のなかにも住宅が浸水した人が多くいました。ちようちんや太鼓などの道具も被害を受けましたが、乾かしたり、ほかの町内から借りたりして、祭りに間に合わせたという事です。

祭りに見に来た秋田市の大学生は「知り合いも床上浸水の被害に遭って暗い気持ちでしたが、竿燈まつりの熱気で元気をももらいました」と話していました。



稲庭うどんの発泡酒が好調

秋田県内の製麺会社とクラフトビールの醸造所が共同開発した、稲庭うどんを副原料にした発泡酒「小川」が話題を呼んでいる。7月末に地元の道の駅などで売り出した300本は、半月たらずで完売。好評を受け両社は追加生産の準備を進め、将来は地元名産品に育てたい考えだ。

共同開発したのは、湯沢市の稲庭うどん小川と、羽後町の羽後麦酒。材料提供や開発元は稲庭うどん小川が、製造と販売は羽後麦酒が担っている。

小麦粉を塩水で練って手延べし、乾燥させる稲庭うどんの製造過程では、麺の長さをそろえる際に3〜4センチほどの切れ端が出る。その量は、月に200キログラムにもなる。これまで稲庭うどん小川では、これらの切れ端をお金をかけて廃棄していたという。

同社では、食品ロスを少しでも減らすため、かむ力の弱まったお年寄り向けの食事に切れ端を活用してもらおうと、横手市の老人ホームなどに寄付。その一方で、切れ端を活用した新商品の開発を湯沢市ビジネス支援センター（ゆざわびズ）に相談していた。同センターが、羽後麦酒を紹介したのがきっかけとなり、1年がかりで商品化にこぎつけた。

稲庭うどんの塩の風味をあえて残すため、うどんの切れ端を副原料としてどの程度配合するかを試行錯誤。麦芽量の約20%にあたる量を使うことで落ち着いたという。酒税法上はビールではなく発泡酒の分類になるため、「稲庭発泡酒」「稲庭うどんから生まれたエール」としてアピールした。

9月に仕込みに入り、羽後麦酒のオンラインショップなどを通じて10月20日ごろの再発売を目指している。希望小売価格は、330ミリリットル瓶入り990円。

